大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

『陽宅十書』訳注III

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 杏紀, 平木, 康平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004426

『陽宅十書』訳注Ⅲ

水野杏紀
平木康平

はじめに

『陽宅十書』は全部で十篇、「論宅外形第一」、「論福元第二」、「論大遊年第三」、「論穿宮九星第四」、「論元空装卦訣第五」、「論開門修造門第六」、「論放水第七」、「論宅内形第八」、「論選擇第九」、「論符鎮第十」で構成されている。居宅を囲む山河などの地勢や周囲の環境と吉凶、居宅の門戸、樹木や池の配置とその吉凶などが記されており、『明史』藝文志に王君榮『陽宅十書』四巻が著録されている。

すでに『陽宅十書』訳注Ⅰでは「論宅外形第一」の前半、また『陽宅十書』訳注Ⅱでは「論宅外形第二」の「陽宅外形吉凶圖説」の前半に訳注を施したが、『陽宅十書』訳注Ⅲはそれを承けた後半である。

底本は『古今圖書集成』堪輿部所収の『陽宅十書』[1]を用い、図と解説は便宜上、番号をふり、原文、訓読、通釈を記した。図が不鮮明な部分はトレースして補った。また、明代の「日用類書」である『五車抜錦』[2]に類似の文があり、それらは各文の註に記載した。

陽宅外形吉凶圖説（続）

一、（原文）此個明堂出寡娘。少年眼疾堕胎亡。
癆瘵氣疾人丁有。流水兒孫實可傷。
（訓読）此の個の明堂は寡娘を出だす。少年眼疾あり、堕胎して亡ぶ。癆瘵氣疾の人丁有り。流水あらば兒孫實に傷む可し。
（通釈）（家の門前の）明堂にこのような円池があるならば、（その家は）いかず後家を出す。少年は目の病を煩い、（家人は）流産して死にいたる。肺病や気を病む家人が出る。（その池に）流れる水があるならば（その家の）子孫はまことに傷ましいことになる。

二、（原文）青龍若有二山随、其家養女被人迷。
招郎義子其家破。不出軍時有匠賊。
〈逆水為吉出人狡猾。順水為凶換姓過

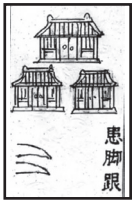
活。〉[3]

（訓読）青龍に若し二山の随う有らば、其の家の養女は人に迷わさる。招郎義子は其の家を破る。軍を出ださず、時に匠賊有り。

〈水に逆らうを吉と為し、人の狡猾なるを出だす。水に順うを凶となし、姓を換え活を過つ。〉

（通釈）もし（家の前の）東側にふたつの山が従うように並んでいるならば、その家の養女が人に惑わされる。入婿や養子は家を破産させる。（家から）軍人を出さないが、時に盗賊が家に入る。

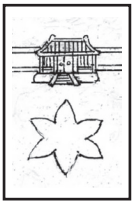
〈水の流れが逆行していれば吉だが、家人を狡猾にさせる。水の流れが順行していれば凶だが、姓を換え（養子となり）生活を誤る。〉



三、（原文）白虎若見二山随、定教婦女被人迷。二姓之家来合活、忤逆人家媳罵姑。[4]

（訓読）白虎に若し二山の随うを見ば、定めて婦女をして人の迷いを被らしむ。二姓の家は来たりて活を合し、人家に忤逆し媳は姑を罵る。

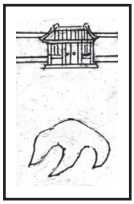
（通釈）もし（家の前の）西側にふたつの山が従うようにならんでいるならば、きまって（その家の）婦女は他の人に惑わされる。（夫側と妻側の）二姓の家族があつまり生活をともにして、他家といさかいをおこし、嫁が姑をののしることになる。



四、（原文）若見明堂似廉貞、斷定眼疾少光明。家生氣疾虚勞死。将来致死滿門庭。[5]

（訓読）若し明堂に廉貞に似たるを見ば、斷定して眼疾ありて光明少なし。家に氣疾を生じて虚勞して死す。将来死を致して門庭に滿つ。

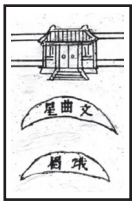
（通釈）もし（家の門前の）明堂に廉貞星に似ている山があるならば、断言していうが、（その家人は）眼のやまいとなり視力に乏しくなる。また、家人は気の病を生じ、衰弱して力がなくなって死ぬ。将来は死に至る人達が家に満ちるようになる。



五、（原文）明堂形似破軍星、不出軍兮出匠眞。損屍外死家退落。孤寡臨門二姓人。[6]

（訓読）明堂の形　破軍星に似たれば、軍を出ださず、匠眞を出だす。屍を損ぎて外に死し、家　退落せん。孤寡　門に臨み二姓の人あり。

（通釈）（家の門前の）明堂に破軍星に似ている山があるならば、（その家からは）軍人を出さずに匠人を出す。（その家人は）外地で客死して、その屍はかつがれて家に戻り、家は没落する。孤児や寡婦が家にいて、（夫側と妻側）二姓の家族が同居するようになる。



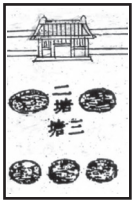
六、（原文）文曲明堂在面前、男女風聲此處生。
男少女多眞不吉。招郎納婿過浮生。[7]
（訓読）文曲の明堂　面前に在らば、男女の風聲　此處に生ず。男少なく女多くして眞に吉ならず。招郎納婿　浮生を過ごす。
（通釈）（家の）門前の明堂に文曲星の形をした山があるならば、（その家人には）男女の風説がここから生じることになる。（その家は）男が少なく女が多くて、まことに不吉である。ひきいれた養子や入婿は、はかない一生を過ごすことになる。

七、（原文）門前若有玉帶水、高官必定容易起。
出人代代讀書聲。榮顯富貴耀門閭。
（訓読）門前に若し玉帶水有らば、高官必ず定めて容易に起こる。人　代代　書を讀むの聲を出だす。榮顯富貴にして門閭を耀かす。
（通釈）（家の）門前に美しい帶のような流れがあるならば、（その家人に）高位高官の者が必ずきまって容易にでてくる。代々にわたり、読書をたしなむ者を輩出する。家人は出世して富貴になり、一門の名声を輝かすことになる。

八、（原文）此樹門前人不知、家招寡母哭聲悲。
二姓同居招女婿、血財損盡又瘟迷。[8]
（訓読）此の樹　門前にありて人知らざれば、家は寡母を招き哭聲悲し。二姓同居して女婿を招く。血財損し盡し又た瘟もて迷う。
（通釈）（家の）門前にこのような樹木があって、人が（その不吉に）気づかないならば、その家は寡婦が声をあげて泣く悲しみを招くことになる。（夫側と妻側）二姓の家族が同居し、婿養子を招く。血脈と財産がともにすっかりなくなって、また流行病いに悩まされるようになる。

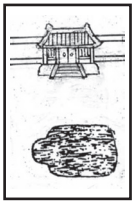
九、（原文）門前若有兩等樹、斷定二姓同居住。
大富之家招二妻。孤翁寡母淚沾衣。[9]
（訓読）門前に若し兩等の樹有らば、斷定して二姓同に居住せん。大富の家は二妻を招く。孤翁寡母　淚もて衣を沾らす。
（通釈）もし（家の）門前にふたつの同じ大きさの樹があるならば、断言していうが（夫と妻の）二姓の家族が同居するようになる。大富豪の家はふたりの妻を招く。（その結果）伴侶をなくした老翁や寡婦は涙で衣をぬらすようになる。

十、（原文）面前凶沙若有此。左火炒來兄必死。
右火冲身弟必亡。當面尖射中此是。[10]
（訓読）面前に凶沙若し此れ有り。左火炒來すれば、兄は必ず死す。右火　身に冲れば、弟は必ず亡す。當面の尖射此れに中たる是れなり。
（通釈）もし（家の）門前にこのように凶沙があり、左の火沙がせまってくるなら、この家の兄は必ず死ぬ。右の火沙が家にむかってくるなら、弟は必ず死ぬ。（家の）正面に尖がって射るような形の沙が、（両者に）あたっているからである。

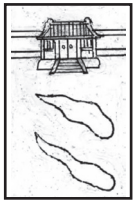


十一、（原文）門前三塘及二塘、必啼孤子寡母嫁。
斷出其家眞禍福。小児落水泪汪汪。[11]
（訓読）門前に三塘及び二塘あらば、必ず孤子寡母　嫁を啼かす。斷じて其の家に眞の禍福を出だす。小児は水に落ち泪汪汪たり。
（通釈）（家の）門前に二つか三つ人口池があるならば、（その家では）必ず孤児や寡婦、嫁を泣かすことになる。断言していうが、その家に本当に禍いがおこる。家の幼子は水に落ちて（死に）、涙がとめどもなく流れることになる。

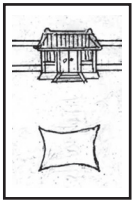
十二、（原文）逆水廉貞為谷将。順水廉貞是退神。
又名喚作訟詞筆。出人狡猾不堪云。[12]
（訓読）逆水の廉貞は谷将為り。順水の廉貞は是れ退神たり。又た名づけ喚びて訟詞筆と作す。人の狡猾云うに堪えざるを出だす。
（通釈）（家にむかってくる）逆水が廉貞星の形をしたものを谷将という。（遠ざかっていく）順水が廉貞星の形をしたものを退神という。また名づけて訟詞（告発文を書く）筆と呼ぶ。（その家は）言うにたえないほどの狡猾な人をだすことになる。



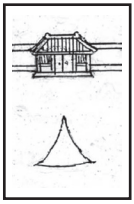
十三、（原文）明堂若見似芒槌、少年枉死此中是。
吐血傷人凶悪死。少年寡母紛紛起。
（訓読）明堂若し芒槌に似たるを見ば、少年枉死すること此の中是れなり。血を吐き人を傷り凶悪にして死す。少年寡母　紛紛として起こる。
（通釈）もし（家の門前の）明堂にのぎをうつ木槌に似た形の水があるならば、家の少年が非業の死を遂げるのは、まさにこの中でおこる。（家人は）吐血し、人を傷つけ、凶悪な状況で死ぬ。このような少年や寡婦がつぎつぎと出てくることになる。



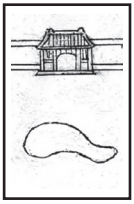
十四、（原文）若見鵞頸鴨頸前、淫亂風聲處處傳。
孤寡少年不出屋。男跏女跛不堪言。13
（訓読）若し鵞頸鴨頸前むを見ば、淫亂の風聲處處に傳わる。孤寡少年　屋を出でず。男は跏にして女は跛なるは言うに堪えず。
（通釈）（家の門前に）鵞鳥や鴨が首を進めているような形の山があるならば、（その家人の）淫乱の噂があちこちに伝わる。（その家の）孤児や寡婦、少年は屋敷からでてこられない。男性は足がまがり、女性は片足が不自由になり、言うにたえないひどいことになる。



十五、（原文）明堂三尖并四尖、斷他致死禍淹淹。
定出氣淚及患眼。更兼脚疾甚難痊。14
（訓読）明堂に三尖并びに四尖あらば、斷じて他れ死を致し、禍い淹淹たり。定めて氣淚を出だして眼を患うに及ぶ。更に脚疾を兼ねて甚だ痊え難し。
（通釈）（家の門前に）三方もしくは四方が尖った形の山があるならば、断言していうが（その家は）死を招き、禍いがつぎつぎとおこってくる。きまって（家人は）気涙をながしてやがては眼をわずらうようになる。さらに脚の病を併発して甚だ治りにくい。

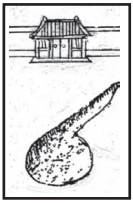


十六、（原文）若見明堂三個角、瞎眼兒孫因此哭。
單傳人口多少亡。氣痛其家常不脱。15
（訓読）若し明堂に三個の角を見ば、瞎眼の兒孫　此れに因りて哭す。人口を單傳して多少亡ぶ。氣痛あり、其の家　常に脱せず。
（通釈）（家の門前の）明堂に三角形の山があるならば、眼の不自由な子孫はこれが原因で哭泣することになる。（家の）血筋は一筋だけがつながれて、ほとんど亡びてしまう。その家は気の病からのがれることができなくなる。

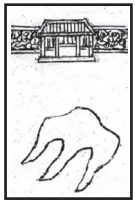


十七、（原文）明堂返轉似裙頭、家中淫亂不知羞。
孤寡少亡端的有。瘟瘇麻痘染時流。16
（訓読）明堂返轉して裙頭に似たれば、家中淫亂にして羞ずるを知らず。孤寡少亡　端的に有り。瘟瘇麻痘　時流に染む。
（通釈）（家の門前に）明堂に裳裾をひるがえしたような形の山があるならば、（その）家中の人が淫乱となり恥知らずになる。（その家から）孤児、寡婦、若くして死ぬ人が（でてくることは）はっきりしている。（家人は）流行病やほうそうといった病に感染する。

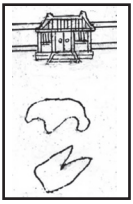
十八、（原文）獨樹孤峯如頂笠、僧道尼姑從此出。
更出瘟疾眼無光。忤逆爭闘事不一。[17]
（訓読）獨樹あり　孤峯　笠を頂くが
如くならば、僧道尼姑　此れ従り出
だす。更に瘟疾を出だし眼に光無し。忤逆爭闘ありて事は一ならず。
（通釈）（家の門前に）独樹があり、笠を戴くような形の独立峯があるならば、（その家から）僧侶や尼僧をだすが、この形がそうさせるのである。さらにその家は流行病いの人をだし、失明する。家人は人にさからい、人と争い、もめ事はひとつですまないことになる。



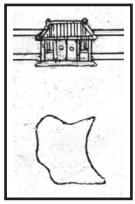
十九、（原文）面前退神挿明堂、代々兒孫主少亡。
順水田園都賣盡。家中縱好也徒然。[18]
（訓読）面前の退神　明堂を挿さば、代
々の兒孫　主　少亡あり。順水あらば田
園都て賣り盡くさん。家中縱好して也た徒然たり。
（通釈）（家の）門前に退神があり、明堂をくしざしするような形であれば、その家は代々の子孫が若死にする。（家から遠ざかる）順水が流れていれば、田畑をすべて売りつくす。また家中の人が勝手気ままに暮らし、また（働かずに）ぶらぶらと過ごすことになる。



二〇、（原文）面前一山如人舞、家中定出風癲子。
時常妖怪入家門。手足之災定不虚。[19]
（訓読）面前に一山あり、人の舞うが如く
ならば、家中定めて風癲の子を出だす。
時に常に妖怪　家門に入る。手足の災い　定めて虚しからず。
（通釈）（家の）門前に人が舞うような形の山がひとつあるならば、その家中ではきまって異常な言動をする子を出す。（その家では）常々妖怪があらわれて門から家に入ってくる。手足の災いがきまって絶えない。

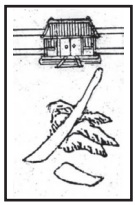


二一、（原文）此個山頭在面前、風癲人出退田園。
献花淫慾多端事。老子将來把火燃。
（訓読）此の個の山頭　面前に在らば、
風癲の人　田園に出退す。花を献じ慾
を淫にし　多端の事あり。老子は将來　火を把りて燃やす。
（通釈）（家の門前に）このような形の山があるならば、（その家には）異常な言動をする人があらわれて、田畑に出入りすることになる。（家人は）色沙汰をおこし、欲をほしいままにし、さまざまな事件がおきる。（その家の）老父はやがて火をとり、火災をおこすことになる。

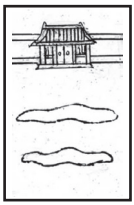


二三、（原文）若見明堂似祿存、三年兩度定遭瘟。
蛇傷牛闘風傷事。曲背蛇腰聾唖人。
（訓読）若し明堂に祿存に似たるを見ば、三年に兩度定めて瘟に遭う。蛇傷牛闘　風傷の事あり。曲背蛇腰　聾唖の人あり。
（通釈）もし（家の門前の）明堂に祿存星（凶星）に似た形の山があるならば、（その家人は）三年に二回、きまって流行病いに遭うことになる。（家人は）蛇にかまれ、牛につかれて傷を負い、伝染病に罹る。背中が曲がる人や腰が蛇のようにまがる人、聾唖の人を出す。

二三、（原文）若見明堂似牛軛、定斷其家會做賊。
瘟瘥疾病不離門。少死人丁哭不絶。
（訓読）若し明堂に牛軛に似たるを見ば、定めて斷じて其の家は做賊に會う。瘟瘥の疾病　門を離れず。少死の人丁　哭すること絶えず。
（通釈）もし（家の門前の）明堂に牛のくびきに似た山があるならば、きまって断言していうが、その家は盗賊に遭遇することになる。その家からは流行病いが絶えずおこる。家人には若死にする人がでて、哭泣する声が絶えない。



二四、（原文）拖尸之山如此様、勧君仔細看形相。
縊頸之山白路行、時師法術要消詳。[20]
（訓読）拖尸の山　此くの如き様ならば、君に勧む　仔細に形相を看よ。縊頸の山に白路行らば、時師の法術　要ず詳を消す。
（通釈）（家の門前に）このように死体をひきずるような山があるならば、諸君、仔細にその形相をみるがいい。頸をくくったように山に白い道がつづくならば、時師の方術をもってしても、かならず（その家の）吉祥を消してしまうことになる。



二五、（原文）若見明堂似蜒蚰、黄腫随身出雲遊。
嬾惰兒孫帶脚疾。兒孫産難盡遭尤。
（訓読）若し明堂に蜒蚰に似たるを見ば、黄腫身に随い出でて雲遊す。嬾惰の兒孫脚疾を帯ぶ。兒孫の産難く盡く尤に遭う。
（通釈）もし（家の門前の）明堂になめくじに似たような形の山があるならば、（その家人は）黄色のはれものが身体に出て、体じゅうに広がっていく。（その家の）なまけものの子孫は脚の病に罹る。子孫のなりわいは困難をきわめ、ことごとく咎めにあうことになる。

二六、（原文）竹木倒垂在水邊、小児落水不堪言。
欄柵添置猶防可。更有瘟災發酒顚。[21]
（訓読）竹木倒垂して水邊に在らば、小児　水に落ちるは言うに堪えず。欄柵添え置かば猶お防ぐこと可なり。更に瘟災有りて酒顚を發す。
（通釈）（家の門前に）竹や木が水際で倒れ垂れさがっているならば、（その家の）幼子が水に落ちて口では言えないひどいことになる。柵を設置すればまだ（事故を）防ぐことができる。（しかし）さらに（家人に）流行病いと（水の）災害をもたらし、酒乱をひきおこす。

二七、（原文）獨樹兩枝冲上天、牽連官事惹憂煎。
斷他年月無移改、坐向官主細推言。[22]
（訓読）獨樹の兩枝　上天を冲かば、官事に牽連して憂煎を惹す。斷じて他の年月移改すること無くんば、坐して官主に向いて細かく推言せらる。
（通釈）（家の門前に）二股に枝分かれした樹木が一本だけ天をつくようにそびえていれば、（その家人は）裁判沙汰に引きずり込まれ、心に痛みと憂いを引き起こす。断言していうが、何年も何ヶ月も（それを）移し改めなければ、罪に坐して裁判官に細々と取調べられる。

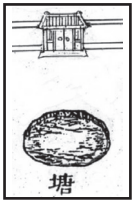
二八、（原文）獨樹生來無破相、必定換妻孤寡眞。
孤辰寡宿定分明。無兒無女妙通神。[23]
（訓読）獨樹　生來破相無くんば、必ず定めて妻を換え孤寡眞す。孤辰寡宿すること定めて分明なり。兒無く女無く神に妙通す。
（通釈）（家の門前に）ただ一本の樹木があり、もともと破たんがなく整った姿であれば、（その家人は）必ずきまって妻をとりかえ、（家には）孤児、寡婦があふれることになる。きまって孤児、寡婦になる運命にあることははっきりしている。男児も無く女児も無く、（家人は）くすしくも神と通ずることができる。

二九、（原文）祿存重樹在門前、二房暗唖不能言。
又主出人瘤跛疾。招瘟動火主憂煎。
（訓読）祿存の重樹　門前に在らば、二房に暗唖あり、言うに能わず。又た主人に瘤跛の疾を出だす。瘟を招き火を動かして主　憂煎す。
（通釈）（家の）門前に祿存星の形をした樹木が重なり茂っていると、二つの部屋の家人が盲になり唖になって口がきけなくなる。またその家人は腫れ物や脚が不自由な病いの人をだす。流行病いを招き、火災をひきおこし、（その家の）主人は憂い心を痛めることになる。

三〇、（原文）黄泉破軍有藤樹、斷定干連官事至。攀址相争入法場。只為姦情盗賊赴。

（訓読）黄泉の破軍に藤樹有らば、斷定して官事の至るに干連す。攀址し相争いて法場に入る。只だ姦情の盗賊　赴くが為なり。

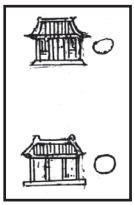
（通釈）（家の門前の）黄泉の破軍星（の位置）にある樹に藤がまとわりついていると、断言していうがきっと裁判沙汰に巻きこまれるようになる。人の足をひっぱり互いに争いながら法廷に入る。（こうなるのは）ただただよこしまな心を持った盗賊が（藤のように）絡みついてくるからである。



三一、（原文）黄泉破軍若有塘、必主小児落水亡。祿存有廟及空屋、必主陰人自溢當。[24]

（訓読）黄泉の破軍に若し塘有らば、必ず主の小児　水に落ちて亡す。祿存　廟及び空屋に有らば、必ず主の陰人　自ら縊當す。

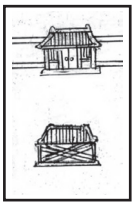
（通釈）（家の門前の）黄泉の破軍星（の位置）に、もし人工池があるならば、必ず（その）家の幼な子が水に落ちて死ぬことになる。祿存星の位置が廟や空き部屋にあたるならば、必ずその家の婦女はみずから首をくくって死ぬことになる。



三二、（原文）小屋孤峯三兩交、迭迭重重寡婆招。墮胎聻眼此中出。説與時師仔細消。

（訓読）小屋に孤峯　三両交わらば、迭迭重重として寡婆を招く。墮胎聻眼此の中より出ず。時師に説與すれば仔細消ゆ。

（通釈）小さな家にぽつんとした小山が二つ三つ交わっているならば、かわるがわる年老いた寡婦を招くことになる。その家から流産する人、眼の不自由な人をだす。時師に相談して助言をもらえれば、細かい災いは消せる。



三三、（原文）停喪破屋在面前、其家官事起連連。常招怪物門庭入、血財盡死又瘟纏。[25]

（訓読）停喪の破屋　面前に在らば、其の家　官事起こること連連たり。常に怪物を招きて門庭に入る。血財盡死して又瘟　纏わる。

（通釈）（家の門前に）遺体とどめたあばら家があるならば、その家では裁判沙汰がつぎつぎとおこることになる。常に奇怪なものを門庭に招き入れる。血脈は絶えて財産は尽き、また流行病いがまとわりつく。

三四、（原文）此樹人家忤逆眞。其家兄弟打合論。
子罵父兮天道滅。媳欺姑媽失人倫。[26]
（訓読）此の樹あらば人家忤逆　眞す。
其の家の兄弟打ちて合論す。子は父を
罵りて天道滅ぶ。媳は姑媽を欺きて人倫を失す。
（通釈）（家の門前に）このような（枝分かれした）樹木があるならば、（その）家人は互いに絶えず背き逆らうようになる。その家の兄弟は殴りあい口論する。子は父を罵って天道は滅びる。嫁は姑をだまして人倫を失ってしまう。

三五、（原文）離郷之樹頭向外、定知落水遭徒配。
曲背蛇腰瞎眼人。小鬼入家驚作害。[27]
（訓読）離郷の樹頭外に向わば、定めて
水に落ちて徒配に遭わんことを知る。
曲背蛇腰　瞎眼の人あり。小鬼家に入り驚かして害を作す。
（通釈）（家の門前に）外向きに離れていくような形の樹があるならば、きまって（その家人は）水に落ちる災難にあい、徒刑配流の憂き目にあうようになる。（その家には）背中が曲がる人、腰が蛇のように曲がる人、眼の不自由な人がでてくる。小鬼が家に入り、家人を驚かし、害をおよぼすことになる。

三六、（原文）鬼怪之樹癰腫前、盲聾暗唖癆病纏。
婦人惹怪常來宅。偸難弄犬使人顚。[28]
（訓読）鬼怪の樹　前に癰腫あらば、盲
聾暗唖癆病纏わる。婦人は怪を惹きて
常に宅に來たらしむ。偸鶏弄犬　人をして顚ぜしむ。
（通釈）（家の門前に）こぶが前面にある奇怪な樹木があるならば、（その家人は）眼や耳、声が不自由になり、肺病が身にまつわりつく。（その家の）婦人は奇怪なものを常に家にひきこむことになる。野良鳥や飼い犬がまつわりつき、家人を顛倒させる。

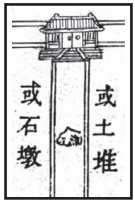
三七、（原文）縊頸之樹藤纏上、要在祿存方上見、
婦人口舌攪親隣。遭瘟動火入黄泉。[29]
（訓読）縊頸の樹に藤　上に纏わり、要
に祿存在りて方に上に見ば、婦人は口
舌ありて親隣を攪す。瘟に遭い火を動かして黄泉に入る。
（通釈）（家の門前に）上部に藤のつるがにまつわりつき、首をくくったような樹があって、その樹の腰のあたりに見上げると祿存星の形があるならば、（その家の）婦人は口論がたえず、親戚隣人といさかいをおこすことになる。（その家人は）流行病いにかかり、火災をおこし、死ぬことになる。

三八、（原文）怪樹腫頭又腫腰、姦邪淫亂小鬼妖。
猫鼠猪雞并作怪。疾病癆瘵不曾饒。[30]
（訓読）怪樹に腫頭あり又腫腰あらば、
姦邪淫亂にして小鬼妖をなす。猫鼠猪雞　并びに怪を作す。疾病癆瘵　曾て饒えず。
（通釈）（家の門前に）頭に瘤、腰に瘤があるような怪樹があるならば、（その家人は）邪悪で淫乱になり、小鬼の妖気にあうことになる。猫、鼠、猪、鶏らが一緒になって（その家に）奇怪なことをおこす。（家人は）疾病、肺病になり、決して治ることはない。

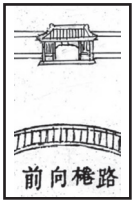
三九、（原文）空心大樹在門前、婦人癆病叫皇天。
萬般吃藥皆無效。除了之時禍斷根。[31]
（訓読）空心の大樹　門前に在らば、婦人　癆病ありて皇天に叫ぶ。萬般の薬を吃するも皆效無し。除了の時　禍いは根を斷つ。
（通釈）（家の門前に）空洞のある大樹があるならば、（その家の）婦人は肺病になり、（苦しみのあまり）天に向って叫ぶことになる。あらゆる薬をのんでみてもいずれも効き目がない。その樹を切り倒したときに、はじめてその禍いの根源を断ち切ることができる。

四〇、（原文）妖怪之樹人不識。文曲之方眞不吉。
男貪淫慾女貪花。破壞風聲情似蜜。[32]
（訓読）妖怪の樹　人識らず。文曲の方ならば眞に吉ならず。男は淫慾を貪り女は花を貪る。風聲を破壞して情は蜜に似たり。
（通釈）（家の門前にあるこの樹が）妖怪の樹かどうかは一般の人にはわからない。これが文曲星の方位にあるのはまことに不吉である。（家の）男性は淫欲をむさぼり、女性は華美をむさぼる。（その家の）評判をぶちこわし、（よこしまな）情はまるで蜜をむさぼるようだ。

四一、（原文）腫頭之樹人難辨、破軍方位不可見。
生離外死不思歸。寡母淚濕香腮面。
（訓読）腫頭の樹は人辨じ難し。破軍の方位は見るべからず。生きては外に離れ、死しては歸るを思わず。寡母は涙もて香腮の面を濕らす。
（通釈）（家の門前に）頭に瘤があるような樹木があっても、一般の人にはそれが凶だとは見分け難い。（ことに）破軍星の方位にはあってはならない。（そうであるならば、家人は）生きては異郷に離ればなれになり、死んでは家に帰ろうとはしない。未亡人はかぐわしい顔を涙でぬらすことになる。



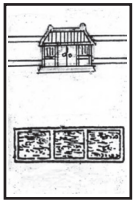
四二、（原文）面前若見生土堆、堕胎患眼也難開。
寡婦少亡不出屋。盲聾暗唖又生災。[33]
（訓読）面前に若し土堆を生ずるを見ば、
堕胎し眼を患いて也た開き難し。寡婦
少亡ありて屋を出でず。盲聾暗唖ありて又災いを生ず。
（通釈）もし（家の）門前に土の山があるならば、（その家人は）流産し、眼をわずらってもう開かなくなる。（その家には）寡婦や若死する人がでて、家から出てこなくなる。眼や耳、口の不自由な人がでて、また災いを生じるようになる。



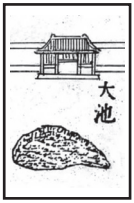
四三、（原文）門前水路捲向前、家中淫亂不堪言。
孤寡少亡傷敗事。家中動火又瘟纏。[34]
（訓読）門前の水路捲きて前に向わば、
家中淫亂なるは言うに堪えず。孤寡少
亡ありて事を傷敗す。家中火を動かして又た瘟纏わる。
（通釈）（家の）門前に水路があり、前方に捲くような形で流れているならば、その家中の人は皆口では言えないほど淫乱になる。（その家では）孤児や寡婦や若死する人がでて、仕事に失敗する。家中に火災がおこり、また（家人に）流行病いがまつわりつくことになる。

四四、（原文）門前若見此尖沙、投軍做賊夜行家。
出人眼疾忤逆有。兄弟分居餓死爺。[35]
（訓読）門前に若し此の尖沙を見ば、投
軍做賊　夜　家を行る。人の眼疾を出
だして忤逆有り。兄弟分居して爺を餓死せしむ。
（通釈）もし（家の）門前にこのような先の鋭い砂地があるならば、（その家の周辺では）夜中に兵士や盗賊がうろつく。（その家人は）眼の病にかかり、（人に）背いてさからうようになる。兄弟は別々に住み、老いた父を餓死させてしまう。

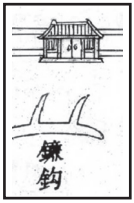
四五、（原文）門前水分八字圖、賣盡田園離鄉土。
淫亂其家不用媒。定出長小離房祖。[36]
（訓読）門前の水　八字の圖に分かるれ
ば、田園を賣り盡くして鄉土を離る。其
の家を淫亂にして媒を用いず。定めて長小　房祖を離るるを出だす。
（通釈）（家の）門前に八の字の形に分かれて流れる水があるならば、田畑を売りつくし、郷里を離れることになる。その家人を淫乱にさせて、媒酌人を用いない婚姻をする。（家人は）きっと老いも若きも家を離れ、祖先をおろそかにするようになる。



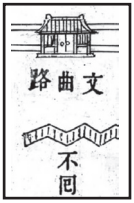
四六、（原文）若有此塘當面前、代代癆疾不堪言。
一塘便斷一人喪。何寵不與外人傳。[37]
（訓読）若し此の塘有りて面前に當らば、
代代癆疾ありて言うに堪えず。一塘便ち一人の喪を斷つ。何をか寵して外人に傳えざる。
（通釈）もし（家の）門前にこのような（区切られた四角い）人工池があるならば、（その家人は）代々は口では言えないひどい肺病に罹る。ひとつの人工池があるごとにひとつの命がたたれる。いったい何をまもろうとして、外部の人を（この池で）遮るのか。



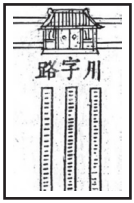
四七、（原文）明堂此塘在面前、三四寡婦鬧暄天。
時師不識其中病。此殺名為喪禍源。[38]
（訓読）明堂に此の塘　面前に在らば、
三四の寡婦　天に鬧暄（どうけん）す。時師は其の中の病を識（し）らず。此の殺　名づけて喪禍源と為す。
（通釈）（家の）門前の明堂にこのような人工池があるならば、（その家の）寡婦が三人も四人も天にむかい慟哭するようになる。時師ですらそうした配置が（その家人に）病をもたらすことに気がつかない。この殺は名づけて喪禍源（死や禍の源）というのである。



四八、（原文）大城左右不朝墳、鎌鈎返生様為凶。
孤寡徒流傷敗事。家中又見遭時瘟。
（訓読）大城の左右　墳に朝せず、鎌鈎生を返す様なるを凶と為す。孤寡徒流せられて事を傷敗す。家中又た時瘟に遭うを見ん。
（通釈）もし大きな城壁の左右が墳丘にむかいあっておらず、（その墳丘が）鎌の刃先のようで生き物をおい返す姿ならば、凶である。（その家では）孤児、寡婦をだし、あるいは徒刑配流され、物事に失敗する。また家中の人が流行病いに罹るようになる。

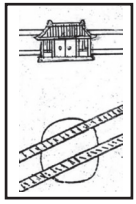


四九、（原文）離鄉迢迢是此路、兒孫出外皆發富。
若然直去不圓還、定出離鄉不歸屋。[39]
（訓読）鄉を離れて迢迢（ちょうちょう）として是れ此（こ）の路あらば、兒孫外に出で皆　富を發す。
然くの若く直去して圓還せざれば、定めて鄉を出離して屋に歸らず。
（通釈）もし（家の門前に）このように鄉里を離れてはるか遠くへ続く路があるならば、（その家の）子孫は外鄉に出て富を築くことになる。このようにただ去って環状でない路があるならば、（その家人は）きまって鄉里を離れたまま家に帰ってこない。

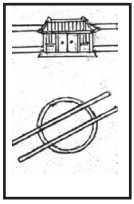


五〇、（原文）門前有路川字行、破財年年官事興。
若然直射見明堂、三箭三男死却身。[40]
（訓読）門前に路有りて川字に行らば、財を破り年年官事興る。然くの若く直射して明堂を見ば、三男を三箭して身を死却す。
（通釈）もし（家の）門前に川の字形をした三本の路があるならば、（その家人は）財産を失い、毎年裁判沙汰がおこる。このように直進して明堂を射かけるような形があるならば、三本の矢が（その家の）三人の男性を射て、その身を死においやることになる。

五一、（原文）當面若行元字路、其家財穀多無数。
面前恰似蚯蚓行、定出癆瘵病多苦。[41]
（訓読）當面に若し元字の路行らば、其の家の財穀多きこと無数たり。面前に恰も蚯蚓の行くに似たれば、定めて癆瘵を出だして病して苦しきこと多し。
（通釈）もし（家の）門前に元の字形をした路がめぐっているならば、その家の財産、穀物は数えきれないほど多く貯まる。（家の）門前にあたかもミミズが進んでいくのに似た路があるならば、（その家は）きまって肺病をわずらい、病が重く苦しむことが多い。



五二、（原文）若見此路在門前、自縊弔頸事干連。
欲弔不弔是此路。術者只要細推玩。
（訓読）若し此の路　門前に在るを見ば、自ら頸を縊弔するの事干連す。弔せんと欲するも弔せざるは是れ此の路なり。術者は只だ細かく推玩せんことを要す。
（通釈）もし（家の門前に）このような路があるならば、（その家人は）自ら首をくくるような事件が連続して起こる。（家人が）首をつろうとしてつりきれないのは、（家の門前に）この路があることによる。占術者はこの点を細かく吟味することが必要である。



五三、（原文）若見田塍如此様、斷定自縊弔高梁。
必然外死損屍轉。孰知、因此死他郷。
（訓読）若し田塍此くの如き様を見ば、斷定して自ら高梁に縊弔す。必然にして外死して屍を損ぎて轉ず。孰か知らん、此れに因りて他郷に死するを。
（通釈）もし（家の門前に）このような形の田の畝があるならば、断言していうが、（その家人は）みずから高い梁に首をくくる。（家人は）必ず外地で客死して、その屍はかつがれて家に戻ることになる。誰が知ろうか、これが原因で他郷に死ぬことになるのを。

五四、（原文）門前若有此寒林、年年瘟疾事相臨。又主怪物入門戸。斷他年年細推論。[42]

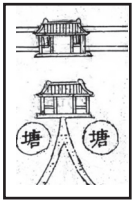
（訓読）門前に若し此の寒林有らば、年年瘟疾の事に相い臨む。又主の怪物門戸に入る。他を斷じて年年　細かく推論せよ。

（通釈）もし（家の）門前にこのような寒々とした林があるならば、毎年流行病いに罹患するようになる。また、主人にとりついた怪物が門戸より入ってくる。その動向を占断して毎年細かく推論せよ。

五五、（原文）前面水路及返飛、定主退妾又離妻。瘸跛孤児随母嫁。順水淫亂主生離。[43]

（訓読）前面に水路ありて返飛を及ぼさば、定めて主は妾を退け又妻を離す。瘸跛の孤児は母に随いて嫁す。順水ならば淫亂にして主は生きながら離る。

（通釈）（家の）門前に反り返って（離れていくような）水路があるならば、きまって（その家の）主人は妾を追い出し、妻と離縁する。脚の不自由な孤児は母に連れられて嫁ぐことになる。流れ去る水であれば、（家人は）淫乱となり、（その家の）主人は妻子と生き別れになる。



五六、（原文）門前有路是火字、兩邊有塘年少死。斷就其家連涙哭。歳殺加臨災禍至。[44]

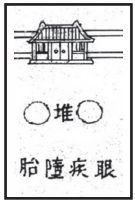
（訓読）門前に路有り是れ火字にして、兩邊に塘有らば、年少くして死す。斷じて其の家に就きて涙哭を連ぬ。歳殺加臨して災禍至る。

（通釈）（家の）門前に二またにわかれた路の両側にまるい人工池があり、それらが火字のような形であるならば、（その家では）年若くして死ぬ人がでる。断言していうが、その家では涙にくれることが連続しておこる。さらに歳殺の禍いが加わって、災禍がふりかかるようになる。

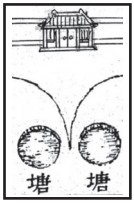
五七、（原文）前有塘兮後有塘、兒孫代代少年亡。後塘急用泥塡起、免得其後受禍殃。[45]

（訓読）前に塘有り後に塘有らば、兒孫代代少年にして亡す。後の塘　急ぎ泥を用いて塡起せば、其の後　禍殃を受くるを免れ得ん。

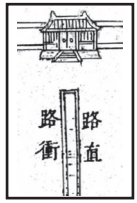
（通釈）もし（家の）前にも後ろにも人工池があるならば、（その家の）子孫は代々少年のうちに死ぬことになる。後ろの人工池をいそいで泥を用いて埋め立てるならば、その後は（家人が）禍いを受けることから免れることができる。



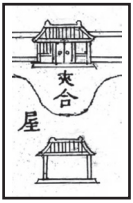
五八、（原文）此屋門前有大堆、住此房内主堕胎。
更兼眼疾年年有。火發加臨更惹災。[46]
（訓読）此の屋の門前に大堆有らば、此の房内に住する主は堕胎す。更に兼ねて眼疾　年年有り。火發　加臨して更に災いを惹す。
（通釈）このように家の門前に眼球のような形をしたふたつの盛土があれば、この家に住む家人は流産する。さらにあわせて眼の病が毎年おきる。火難が加えてふりかかり、さらに災いを惹きおこすことになる。



五九、（原文）此屋門前兩口塘、為人哭泣此明堂。
更主人家常疾病。災瘟動火事干連。[47]
（訓読）此の屋の門前に兩口の塘あらば、人をして此の明堂に哭泣せしむ。更に主人の家　常に疾病あり。災瘟動火の事　干連す。
（通釈）このように家の門前にふたつの人工池があるならば、その家の人を（門前の）明堂で哭泣させるようなことがおこる。さらにその家の人々は常に疾病をわずらう。（その家では）災禍や流行病い、火災にかかわる事件が連続する。



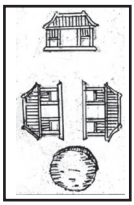
六〇、（原文）此屋若有大路冲、定主家中無老公。
殘疾之人眞是有。名為暗箭射人凶。[48]
（訓読）此の屋　若し大路の冲たる有らば、定めて主の家中　老公無からん。殘疾の人　眞に是れ有り。名づけて暗箭射人の凶と為す。
（通釈）もしこのように家（の門前）に大きな路がつきあたっているならば、きまって（その）家には老人がいない。（その家には）傷害者や病人がまことに多い。これを暗箭射人の凶（どこからとんでくるかわからない矢が人を射る凶）と名づける。



六一、（原文）門前若見有小屋、官事臨門來得速。
便見何年凶禍生。歲煞加臨災更毒。
（訓読）門前に若し小屋有るを見ば、官事　門に臨みて來たること速かなるを得ん。便ち何れの年にか凶禍の生ずるを見ん。歲煞加臨して災い　更に毒し。
（通釈）もし（家の）門前に小屋があれば、（その家には）裁判沙汰になる事が速やかにふりかかってくる。何年か先には（その家に）凶禍がふりかかる目にあう。歲殺の災いが加わると、その災禍はさらにひどいものとなる。

六二、（原文）此屋若在大樹下、孤寡人丁斷不差。
招郎乞子家中有。瘟瘧怪物定交加。[49]
（訓読）此の屋　若し大樹の下に在らば、孤寡の人丁あるは斷じて差わず。招郎乞子　家中に有り。瘟瘧怪物　定めて交加す。
（通釈）もしこのように家が大樹の下にあるならば、断言していうが、（その家に）孤児、寡婦がでてくるのはまちがいない。家中には入婿や養子がいることにある。（その家人は）流行病いや黄疸が、さらに怪物がきまってかわるがわる襲ってくる。

六三、（原文）小石當門多磊落、其家説鬼時時着。
小口驚嚇不須言。氣絶聾唖人難覚。[50]
（訓読）小石　門に當たりて多く磊落（らいらく）すれば、其の家は説鬼　時時に着く。小口驚嚇（きょうかく）すること言を須たず。氣絶聾唖の人あり、覚り難し。
（通釈）（家の）門前に多くの小石がごろごろ転がっていると、その家ではいつも鬼にまつわる奇怪なことにとりつかれる。ちいさな子供が驚くことはいうまでもない。（家では）気絶する人、耳や口が不自由な人がでてくるが、（一般人はそれに原因があることに）気づくことは難しい。



六四、（原文）此個人家品字様、讀書作館起家荘。
人財大旺添田地。貴子聲名達帝郷。[51]
（訓読）此の個の人家　品字の様なれば、書を讀み館を作り家を起こして荘んならん。人財大いに旺（さか）んにして田地を添う。貴子の聲名は帝郷に達す。
（通釈）このように品の字の形に人家が配置されているならば、（その家は）読書家を輩出し、そのための学館をつくり、家をおこしてさかんとなる。家人も財産もおおいに増え、田畑も増し広がることになる。貴い子孫の名声は帝都にまで達するようになる。

おわりに

本稿に収録した「陽宅外形吉凶圖説」（続）は、おもに住宅とその門前にある樹木、人工池、水流、山砂などとの関係によって、住宅の吉凶を占断したものである。全部で六四例が挙げられているが、そのほとんどは凶であり、住宅の周辺環境に関する禁忌が記されている。

この六四の事例の中では、とくに門前の樹木、山水、道路の形状と配置が重視されている。

まず、門前にある「樹木の形状」の事例が目立って多い。二本

の同等の樹（九）、水辺に倒れ垂れ下がった竹木（一一六）、独樹（一八、二七、二八）、妖怪の樹（四〇）、藤がからんだ樹（三七）、離郷の樹（三五）、腫頭の樹（四一）、腫がある鬼怪の樹（三六）、腫のある怪樹（三八）、空心大樹（三九）、寒林（五四）、大樹（六二）などがあり、いずれも住宅にとって凶とされている。

門前に樹木があれば、居宅の日照や風通しを妨げる可能性がある。あるいは根を張って居宅に影響を与えるなどの被害もあろう。けれどもこれらの樹木が凶とされたのは、そうした実用的な側面から凶とされることよりも、むしろ心理的な側面にもとづくものが多いと推測される。門前に奇怪な形状の樹木があるならば家人はそれを日々、眼にすることになる。気がつかないうちに家人に不吉なイメージとして心に留め置かれ、それがやがてその家に不吉なできごとをもたらすと考えられたのではないか。ひとつの事象が似通った別の事象を引き起こす、という類感呪術的思考が、その背後に見てとれる。

次に、「門前にある山の形状」の事例も多く挙げられている。

東の二山（二）、西の二山（三）、廉貞星の形の山（四）、破軍星の形の山（五）、文曲星の形の山（六）、禄存星の形の山（一二）、鵞頸鴨頸の山（一四）、三、四尖の山（一五）、三角の山（一六）、人舞の山（二〇）、牛軛の山（二三）、拖尸の山（二四）、蜒蚰の山（二五）などがあり、いずれもその住宅に凶をもたらすとしている。これらも門前にある山の形状の不吉なイメージがその家人の心理に影響を与え、不幸をもたらすと考えられたのであろう。

また、「門前にある路」の形状にも注目している。路衝、路直（六〇）のように、道路が門に向かっている居宅は凶宅とされる。外敵や悪霊などの侵入を受けやすいと考えられるからである。これは現代でもこうした居宅は車に衝突されやすい危険な居宅であるとされており、経験則にもとづいて凶とされたものも含まれていることがわかる。

一方で川字路（五〇）、元字路（五一）、人の形の路と二つの塘の火字路（五六）などは路の形に似た字が持つイメージから吉凶を論じているふしがうかがえる。

以上のことから、当時の人々は住宅の周囲の環境に深い関心を寄せていたことがうかがえる。周囲の環境条件としては、日当たりや風の流れ、水の利用などの実用的な側面も考慮されたと考えられるが、一方で樹木や山川、道路、池塘などの形状や配置が重視された。住宅周囲の樹木や山川などの形状や配置は、その住宅に住む家人の心身などに対して、さまざまな影響を与えるものとされ、住宅周囲の環境を判断する重要な要件とされていたのである。

註

『陽宅十書』訳注Ⅰは「人文学論集　第26集」（大阪府立大学　人文学会　二〇〇八）、『陽宅十書』訳注Ⅱは「人文学論集　第27集」（大阪府立大学　人文学会　二〇〇九）に収録。

1　清　陳夢雷編『古今圖書集成』（鼎文書局　一九七七）の博物彙編　藝術典　第六七四巻　堪輿部所収の『陽宅十書』を底本とした。

2　『五車抜錦』は『新鍥全補天下四民利用便觀五車抜錦』の略称ある。東京大學東洋文化研究所の仁井田文庫に明代の萬暦二十五年（一五九七）刊本が所蔵されている。その影印本は『五車抜錦』（監修　酒井忠夫、編者　坂出祥伸・小川陽一『中國日用類書集成』第一巻、第二巻　汲古書院　一九九九）に収録されている。以下、引用に際しては「五車」と略記する。

3　この条のみ字数が二十八文字を越えている。「逆水為吉出人狡猾。順水為凶換姓過活。」の部分はおそらく十二条の「逆水廉貞為谷将。順水廉貞是退神。又名喚作訟詞筆。出人狡猾不堪云」の一部などが誤って混入したもので、衍文であろう。

「五車」　青龍若有二山随、其家養女被人迷。招郎義子其家有。不出軍時匠賊随。逆水為吉。出人狡猾。順水為凶。換姓过活。

4　「五車」白虎若見二山随、定教媳婦被人迷。二姓之人来合話、忤逆人家媳罵姑。

5　「五車」若見明堂似廉貞、断定眼疾少光明。家生氣疾虚勞死。将来致死入門庭。

6　「五車」明堂形似破軍星、不出軍兮出匠真。扛屍外死家退落。孤寡臨門二姓人。

7　「五車」文曲明堂在面前、男女風声此處生。男少女多真不吉。招郎納婿过浮生。

8　「五車」此樹門前人不知、家招寡母哭聲悲。二姓同居招女婿、血財損盡又瘟迷。

9　「五車」面前若有兩等樹、斷定二姓同居住。大富之家招二妻。孤翁寡母涙沾衣。

10　「五車」面前凶沙若有此、左火尖來兄必死。右火冲身弟必亡。當面尖射中死是。

11　「五車」門前三塘及二塘、必啼孤子寡母嫁。断出其家真禍福。小児落水泪汪汪。

12　「五車」逆水廉貞為谷将。順水廉貞是退神。又名換作詞訴筆。出人狡猾不堪論。

13　「五車」若見鵞頸鴨頸前、淫亂傳風声處處。孤寡少年不出屋。男跏女跛不堪言。

14 「五車」明堂三尖并四尖、断他致死禍淹淹。定出気疾及患眼。更兼脚疾甚難痊。

15 「五車」若見明堂三個角、瞎眼兒孫因此著。單傳人口少亡多。気痛其家常不歇。

16 「五車」明堂返轉似裙頭、家中淫亂不知羞。孤寡少亡端的有。瘟瘇麻痘染時流。

17 「五車」独樹孤峯如頂笠、僧道尼姑從此出。定主瘟疾眼無光。忤逆鬪争事不一。

18 「五車」面前退神揷明塘、代代兒孫主少亡。順水田園都賣尽。家中縦好也徒然。

19 「五車」面前一山如人舞、家中定出風顛癲子。時常妖怪入家門。手足之災定不癆。

20 「五車」拖尸之山如此様、勧君子細看形相。縊頸之山白路行、時師法術要消詳。

21 「五車」竹木垂倒水辺、落水其山子断著。小児落水不堪言。更兼瘟火発酒顛。

22 「五車」獨樹兩枝冲上天、牽連官事苦憂煎。断他年月無移改、坐向官主細推言。

23 「五車」独樹生来无破相、必定換妻孤寡真。孤神寡宿甚分明。无兒無女妙通神。

24 「五車」黄泉破軍若有塘、必主小児落水亡。祿存在廟及空屋、必主険人自溢當。

25 「五車」停喪破屋在面前、其家官事起連連。常招怪物門庭入、血財盡死起瘟纏。

26 「五車」此樹人家作忤逆（在）。其中兄弟打相論。子罵父兮天道威。憾媳欺姑失人倫。

27 「五車」離鄉之樹頭向外、定主落水遭徒配。曲背蛇腰瞎眼人。小鬼入家驚作害。

28 「五車」鬼怪之樹癰腫前、盲聾暗唖癆病纏。婦人惹怪常来宅。偸難弄犬使人顛。

29 「五車」縊頸之樹藤纏上、要伜祿存方上見、婦人口舌瘟親隣。遭瘟動火入黄泉。

30 「五車」怪樹腫頭又腫腰、姦邪淫亂小鬼妖。猫鼠猪雞并作怪。疾病癆瘵不曾饒。

31 「五車」空心大樹在門前、婦人癆病叫皇天。千般吃薬皆无效。除了之時禍断根。

32 「五車」妖怪之樹人不識。文曲之方真不吉。男貪淫慾女貪花。破壊風声情似蜜。

33 「五車」面前若見生土堆、堕胎患眼也難當。寡婦少亡不出屋。盲聾暗唖又生灾。

34 「五車」門前水路捲向前、家中淫亂不堪言。孤寡少亡傷敗事。家中動火又瘟纏。

35 「五車」門前若見此尖沙、投軍做賊夜行家。出人忤逆眼疾有。兄弟分居餓死爺。

36 「五車」門前水分八字圖、賣盡田園離鄉土。淫亂其家不用媒。定出長小房離相。

37 「五車」若有此塘在面前、代代癆瘵疾不堪言。一塘便断一人喪。何労不與外人傳。

38 「五車」明堂此塘在面前、三四寡婦鬧喧天。時師不識其中病。此殺便為喪禍源。

39 「五車」離鄉迢迢是此路、兒孫出外皆発福。若然直去不回還、定主離鄉不歸屋。

40 「五車」門前有路川字形、被財年年公事興。若然直射見明堂、三箭三男死却身。

41 「五車」當面君行玄字路、其家財谷多无数。面前恰似蚯蚓形、定出癆瘵病多苦。

42 「五車」門前若有此寒林、年年瘟疾事相臨。又主怪物入門戸。断他年月細推論。

43 「五車」前面水路及返飛、定主退妾又離妻。跏跛孩児随母嫁。順水淫亂主生離。

44 「五車」門前有路似火字、兩邉有塘年少死。就断其家連涙哭。歳殺加臨灸衿至。

45 「五車」前有塘兮後有塘、兒孫代代主少亡。後塘急用泥填起、免得其家衿忠殃。

46 「五車」此屋門前有大堆、此住房内主堕胎。更兼眼疾年年有。大殺加臨更莫開。

47 「五車」此屋門前兩口塘、為人哭泣此明堂。更主人家常疾病。遭瘟動火事相干。

48 「五車」此屋若有大路衝、定主中家無老公。殘疾之人真是有。名為暗箭射人凶。

49 「五車」此屋若在大樹下、孤寡人丁断不差。招郎乞子家中有。瘟瘟怪物定絞加。

50 「五車」小石當門多磊落、其家説鬼時時着。小口驚嚇不須言。氣疾聾唖人誰覺。

51 「五車」此個人家品字様、讀書作館起家荘。人財大旺添田地。貴子声名達帝鄉。